

Title	The English parliament in the middle ages, edited by R. G. Davies, and J. H. Denton
Sub Title	
Author	森岡, 敬一郎(Morioka, Keiichiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1983
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.52, No.3/4 (1983. 1) ,p.119(459)- 120(460)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19830100-0119">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19830100-0119</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 批評と紹介

### The English Parliament in the Middle

Ages.

edited by R. G. Davies, and J. H. Denton.  
(Manchester, 1981)

森岡敬一郎

本書は、ノッティンガム大学教授であった J. Roskell 氏に捧げられた謝恩論文集である。Roskell 教授は、中世後期の議会史、特に下院の人的構成の研究で著名であり、'The Knights of the Shire for the County Palatine of Lancaster, 1377-1460. (Chetham Society, New Series. XCVI, 1937) を始め、'The Commons in the Parliament of 1422; English Society and Parliamentary Representations, (Manchester, 1954) と 'The Commons and their Speakers in English Parliaments, 1376-1525, (Manchester, 1964) 等の著書で知られる。議会史の権威でもある。本書は、同教授のゆかりの著者達が、同教授の有名な論文 'Perspectives in English Parliamentary History' (Bulletin of the John Rylands Library, XLVI. pp. 448-75. 後に Historical Studies of the English Parliament, 11, 1399-1603. ed. F. B. Fryde and E.

Miller (Cambridge, 1970) に再録) に則り、イングランド議会発達の諸相を、一三世紀より、一六世紀初頭まで、五つの時代と一つの特殊テーマを扱う個別論文で考察し、最後に、一七世紀の展望を行なった結論的な章を附してある。次に、その内容を記す。(別に、教授の著作目録あり)

- I 'The Prehistory of Parliament  
J. C. Holt Emmanuel College, Cambridge
  - II 'The Formation of Parliament, 1272-1377  
G. L. Harriss Magdalen College, Oxford
  - III 'Parliament and the Constituencies, 1272-1377  
J. R. Maddicott Exeter College, Oxford
  - IV 'The Clergy and Parliament in the Thirteenth and Fourteenth Centuries  
J. H. Denton University of Manchester
  - V 'Parliament, c. 1377-1422  
A. L. Brown University of Glasgow
  - VI 'Parliament, 1422-1509  
A. R. Myers late of the University of Liverpool
  - VII 'A Seventeenth-century Perspective  
D. H. Pennington Balliol College, Oxford
- これらの論文の多くは、最近の研究成果をサーヴェーしたもので、現状の研究状況の所在を示すものとして、極めて有益である。特に、J. H. Denton の 'The Clergy and Parliament in the 13th and 14th Centuries' は、今日我が国で殆んど取上げられ

たことのない聖職者と議会との関係のアップ・トロー・デイトの入  
門としての意味が大きいものと思われる。

些か他の論文と違うのは、J. C. Holt, *The Prehistory of Parliament* と、最後の D. H. Pennington, *A Seventeenth-Century Perspective* である。前者は、主として召集令状の分析を通じて、一三世紀の議会(即ち、これが Holt 教授の Pre-history 期の Parliament になる)の本質の解明に挑まれた、可成り野心的な、オリジナルな見解を表明した論文であり、後者は、一七世紀の議会についての Pennington 博士の独自のパー  
スペリティブを展開したものである。筆者の関心から見ても興味を惹かれるのは Holt 教授の論文であるので、この内容の一端を紹介して置きたい。

Holt 教授がこの論文で追求されたのはイングラッド中世議会の  
初期的な形態の、憲法史上の本質論である。教授は、論文の冒頭に於いて、中世議会の本質論の論争に直接参与しようとするものではないと、その目的を極めて控目に限定されているけれども、  
所論そのものは、史前期の議会の本質論であり、しかも、数少ない史料を全ての先入主を排して「あるがままの姿」で見直すこと  
によって、従来の見解に拘われない独自の結論に到達されたと言  
ってよいと思う。この時期の議会の基本的史料の第一のものは、  
召集令状である。この令状の内容を全くそのままに理解して、そ  
の結果召集された「代表」の姿を心に描くことから先ず始める。先  
ず考えられる一つの問題は、各州の代表が召集日に果して議会に  
出席し得たか否かの点にある。Holt 教授は、これが大体不可能

であったらしいことを確認され、こうしたことから出発して、当  
時の議会の下院が、一つの「身分」をなすものでもなく、またその  
主な機能が「同意」を与えることにあったのでもないことを結論  
される。即ち、中央による各地方の実情把握と、地方への中央の  
意志伝達という機能が中心であり、従って、全員が一時に一同に  
会する必要がなかったとし、ここに参集した人々が代表したもの  
は、「身分」ではなく、「地域」であったというのが、その結論であ  
る。論を進めるに当って、史料に対して恣意的な解釈を加えるこ  
とを出来るだけ避け、厳にその文意をそのままに解しつつも、所  
論が混乱しないのは、一三世紀に対する深い理解に支えられた、  
一つのパーспекティブの上に統合されているからであろう。史  
料処理の上の参考としても、教える所が多いように思われる。

T. J. Quinn;

*Athens and Samos, Lesbos and Chios;*

478-404B. C., Pp. VI+105.

Manchester U. P., Manchester 1981. £14.50.

真 下 英 信

Publications of the Faculty of Arts of the Uni-  
versity of Manchester の二七号として出版された本書の目的  
は、テロス同盟の支配権を掌握したアテーナイとその覇権の擁護